
悪魔に支払う奇跡の代価

楓猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔に支払う奇跡の代価

【Nコード】

N0120Y

【作者名】

楓猫

【あらすじ】

自らの冒険を終え、隠居生活をおくる主人公。家事好きの悪魔とのんびり暮らしていたのだが・・・
終わったはずの物語が動き出す。鈍感でズボラ、でも意外とハイスペックな男装主人公と家事に魅せられた美形悪魔がおくる、笑いあり涙あり？な物語。

始まりの終わりとその後の日常

奇跡を起こすためには代償が必要だ。

物事には始まりがあれば終わりがある。

たとえその結末が、望まぬものであったとしても。

「どうするんだ？」

聞きなれた声がして、自分が呆然としていたことに気づく。思っていた以上に自分はショックを受けているらしかった。

床には痩せた男が血まみれで倒れている。

先ほど自分が殺した相手だ。憎んでも憎みきれない相手。

剣で一突き。それであっさりと死んでしまった。いっそ拍子抜けしたと言ってもいい。虚しささえ感じられない。

男が死ぬ前に並べた、命乞いでさえない言い訳の羅列。

それは所謂『真実』というやつを多分に含んでいた。ようやくわかった事の真相は、容赦なく残酷すぎる現実をつきつけてくる。

黒幕を倒して、それですべてが解決すれば、どんなに良かっただろう。

願いを叶えるために必要な力をつけた。知りたかった真実もわかった。

けれど本当に望んだ結果だけは手に入らない。

「どうしようもないさ」

一応、選択肢は存在している。けれど、選べないのだから仕方ない。

それほど長い付き合いではないが、目の前の悪魔にはそのくらいお見通しだろう。

悪魔は恐ろしく美しい姿をしている。

輝く金の髪に透き通る緑の瞳。顔だけ見れば天使のようだが、背中にあるのはまぎれもない、悪魔の証たる漆黒の翼だ。

強大な魔力を持ち、契約相手に絶大な力を与える。これほど早く真実にたどり着いたのには、この悪魔の働きによるところが大きい。

しかし、悪魔との契約には代価が付き物だ。目的と引き換えにするもの無くば、契約は成り立たない。

そして、直接尋ねてみたことは無いが、おそらく自分が契約した相手は悪魔の中でも相当上位な存在だろう。

いったい何が要求されるのか。実のところ、いつもはぐらかされ

てばかりで、明確な答えを聞いたことは無かった。

「けりはついたから、おまえとの契約は一応完了ってことになるのかな」

そう言って、浮遊している悪魔を見上げたが、悪魔は何を考えているのか良く分からない表情をしていた。

策謀をめぐらすことは多くても喜怒哀楽ははっきり見せてくる相手だったので、こつこつのはひどく珍しい。らしくなく遠慮でもしているのか。

「好きなもの、取っていつていいよ。あゝ魂が好物なんだっけ？」

確かそのような記述をどこかの本で読んだ気がする。なんでも絶望に染まった魂を好むとか。

今の自分の状態が絶望というやつなのかは知らないが、これ以上に望みもないので、今までの働きへの報酬として喰われてやってほしいという気分になっていた。

「・・・本当に、もう望みは無いんだな」

「ああ」

あ、でもできれば痛くしないでほしいなあ、とは思つ。痛みには強い性質だが、だからといって好き好んでいたぶられたくない。

「優しくしてね」

などと茶目つけ混じりに言えば、悪魔は苦笑した。

こつこつという表情は人間ぽい。

「ああ、優しくしてやるさ。大事なご主人様だからな」

そう言って、悪魔は翼を広げた。

視界が黒く染まる。

そうして何もわからなくなった・・・

冒険に出る者というのは、何かしら追い求めるものがある。それは大抵財宝だったり、力であったり、真実だったりするのだろう。そうして得られたものが本当に自分にとって必要なものであったのかは、旅を終えてみなければわからない。

そしてそれをどう使うかは、得た本人次第だ。

その点、自分は有効に活用できている、とキラは自負している。

キラもかつては冒険者と呼ばれる者だった。幾多の困難を乗り越

え、失ったものもあつたが、旅を通して得たものは大きい。
たとえば……

「キラ。掃除の邪魔だ。そこをどけ」

目の前にいる俗に超絶美形と呼ばれ、外にでたら女子にキヤーキヤー言われそうな男。間違いなく、彼こそ一番の収穫だったに違いない。

容姿のみならずあらゆる家事に優れた、まさに一家に一人はほしい理想の人物。

いや、正確には“人”物ではないが……

「おいキラ」

「うるさいなあ。わかったよ。どけばいいんだろう、ルウ」

なかなか動こうとしないキラに業を煮やして、ルウの声に凄味が増す。それを聞いてようやくキラは立ち上がった。

いかにも渋々といった感じであったが、下手にルウの機嫌を損ねると今日の食事が恐ろしいことになるのだ。

が、自他共に認める面倒臭がりのキラだ。すぐに大して離れていないソファーにごろりと横になった。しかしルウの方も慣れたもので、とりあえず床を綺麗にしようとそのまま掃除を続ける。

悪魔つて以外と家庭的なのだなあ、とソファーで半分寝ぼけながらキラは思った。

てつきり魂を取られるものだと思っていたのだが、気づいたら3食昼寝付きな生活が待っていた。

しかもどうやら家事の魅力に嵌ったらしく、炊事洗濯はすべての悪魔がこなしている。

特に料理が得意で、新作料理を作っているときなどは非常に楽しそうだ。おかげですっかり舌が肥えてしまっていて困る。

どんな思惑があつてのことなのか、あるいは単なる暇つぶしなのか。キラにはよくわからない。
けれど、

(こんなのが悪魔の望んだ代価なら、悪くない)

本格的に眠気が襲ってきた。

起きた時には、部屋もきれいに片付き、悪魔が作ったおいしい料理が食卓に並んでいることだろう。

夕飯はシチューだといいなあと思いながらキラは目を閉じた。

代価は悪魔と過ごす幸福な日常。

始まりの終わりとその後の日常（後書き）

突然降ってきたネタです。

こんな感じなのがベースになります。

設定はたぶんシリアスですが、いかせるかどうか…

ちなみにわかりにくいでしょうが主人公は一応女です。

キラは悩んでいた。

目の前に落ちているものをどうするかについて。

見たところ手足は二本ずつ付いているし、頭も潰れていない。僅かに胸が上下に動いているので、生きてはいるらしい。

ただし、その腹部には長大な剣が突き刺さっているが。

生きているのは目の前の存在だけのようだった。辺り一面血の海というやつで、いくつか死体が転がっているが、キラは軽く一瞥しただけですぐに視線を戻した。

見ず知らずの赤の他人の為に墓を作ってやろうとか、弔ってやろうなどという気にはならない。放っておけば獣たちに食われて自然と土に還るだろう。

問題は死人ではなく、生きている方だ。

血塗れではあるが、身分の高そうな服を身に着けた、端正な顔立ちの男。おそらく貴族出身の騎士というところだろう。

関わると面倒なことになるに違いない、とキラの勘が告げている。

だが、このまま放っておけば確実に死ぬだろう。剣によってもたらされたのは致命傷ではないが、出血量が多すぎるのだ。

キラは面倒なことが嫌いだ。だが、人並みに良心や罪悪感とか言われるものを持っているのである。そして皮肉なことに、自分が助

けられるだけの能力を有していることを知っていた。
諦めたように溜め息を吐いた。

「怒るかな」

ぼそりと呟いた言葉は、家にいる相棒に対してだ。今現在は家に調理中のはずだ。

そもそもキラの外出の目的は、山で鳥かウサギを捕まえて夕食に使う肉を調達することだったのだ。

代わりにこんなものを持って帰ったら何を言われるだろう。

面倒を増やしたと怒るか、食べられないものを取ってきたことに呆れるか。

「あ、悪魔って人肉も食べるのか？」

目を輝かせて調理し始めたらどうしようか。

さすがにそんな料理は遠慮したいなあとキラは思った。

目の前の死体もどきを持ち帰ることは、決定済みだった。

「馬鹿か」

開口一番に馬鹿にされた。わかつてはいたが、人間扱されれば傷つ

く。

「しかも獲物なしだと？こんな食えもしないものだけ拾ってきやがって」

（あ、食べないんだ…）

ちょっと安心したような、がっかりしたような微妙な気持ちになるキラであった。

キラが連れ帰った男は一通り治療され、今はベッドで寝ている。出血量が多かったため顔に血の気はないが、絶望的な状態からは脱していた。あと数日は経過を診なければならぬが、若く体力のありそうな男なのでなんとかなるだろう。

しばらくすると台所の方からいい匂いがしてきた。間抜けに鳴いた腹の虫によって、自分が空腹であることに気づく。

どうやらルウは戦利品抜きでもうまい料理を作ってくれたらしい。さすが悪魔だ、とキラは微妙に感心する。

キラはさらに感心した。匂いにつられたのか、男が目を開けたのだ。

「じ、こじは…」

男の目は見慣れぬ天井を虚ろにさまよい、しばらくしてキラの顔で焦点を結んだ。

見知らぬ存在を警戒したのだろう。男は一瞬体をこわばらせ、無意識に腰に手を伸ばした。彼の持っていた剣など治療の邪魔にしか

ならないのでとうに取り除いていたのだが、そのことが男にいつそう不信感を抱かせたらしい。射殺するような鋭い視線をキラにむけ、隙なく身構える…はずだった。

「!?」

あれだけの重傷だったのだから、当たり前だが動けば痛い。男は痛みで悶絶した。涙までながしそうな勢いだ。

(アホらし…)

苦しむ男を視界の端に入れながら、キラは呆れて溜め息をついた。どうやら男には自分の体の状態が理解できていなかったらしい。

「全身打撲の上切り傷だらけ。肋骨四本が骨折して一本は肺に突き刺さってた。右手と両足の腱は切れてたし、左足は毒で壊死寸前。腹部に刺さった剣は貫通。けど、致命的な臓器や神経の損傷はなかったし、一番太い血管は無事だった。不幸中の幸いだな。だから助かったんだ」

そんな体で平気な顔して動き回れる奴などいない。鎮痛剤を使うにしても限界がある。

「大体あんたを殺すぐらいわけなかったよ。見ない振りして立ち去ればよかったんだから。それをわざわざ連れて帰って手当てまでして恨まれる謂われなんて一つもないんだけど」

怪我人相手でもキラは容赦しない。冷たい視線で軽く相手を見据え、小馬鹿にしたようにふっと笑った。

さて、どんな反応が帰ってくるだろう。あまりにも恩知らずな発

言をしたら蹴りの一つも入れてやる、と意地悪く考えていたキラの思考を遮ったのは静かな声だった。

「すまない。命の恩人に対して無礼な態度をとった。助けってくれたこと、礼を言う」

先ほどまでとは打って変わって物静かな雰囲気を称えた、まさに騎士と呼べる人物がそこにいた。おそらく、普段の男はこういう人格なのだろう。

「わかればいいさ」

キラとてそれほど気にしていない。怪我をして気が立つのは人も獣も同じだ。

先ほどとは異なる柔らかな笑みを見せたキラに安心したのか、男も表情を緩めた。

「私はセージユ国白炎騎士団第3部隊隊長クロード・ラドナだ」

「俺はキラ。よろしく隊長さん」

場が和やかになったところで、低く唸るような音が響いた。

そつえば、男が目を覚ましたきっかけは…

「とりあえず、飯にするか」

顔を赤らめた男の肩を軽く叩き、キラはまた笑った。

気の利く悪魔によって作られた、かなり美味しい病人食を一通り食べ終えて、クロードは満足そうに息を吐き出した。

「こんなに美味しい食事が食べられるなんて思いませんでした」

聞きよつによつては失礼な発言だが、悪気はないのだろう。それほど山奥に住んでいるのだから、そう思つのも無理からぬことだ。

クロードは純粹にルウの料理の腕を賞賛していた。

「それはどうも」

それがわかつているので、ルウも軽く笑みを返した。誉められたら悪い気はしない。それは悪魔にとつても同じなのである。

ルウの笑顔にクロードは目が釘付けになった。

彼自身も今までその美しい容姿を賞賛され続けてきた立場だが、ルウは別格だった。ふとした所作でさえ、万民の目を引きつける。

その笑顔を向けてもらうためなら、全財産を差し出しても構わない、という者さえざらだろう。

まさに傾国というに相應しい。

ぼつつとルウに見とれるクロードと、分かっているやっついているであろうルウを見やり、キラは

(あーあ、またやってるよ)

と冷静に状況を考えていた。

この悪魔との付き合いもそこそこ長くなってきたキラが、今更笑顔ごときで動揺するはずもない。

一緒に旅をしているときも、有力者を誑かして便宜をはからせたり、情報を聞き出したりと有効活用されていた。

本性を知っているキラからすればいつそ寒気がするぐらいだが、初対面の相手は悉く引つかかる。知らないというのは幸せなことだ。

ルウがそういう行動をとるということは、何か意図があるということだ。おそらくクロードの情報や目的を聞き出そうとしているのだろう。

怪我人相手に少々酷かもしれない。ルウはキラに対して遠慮しないが、他に対しては容赦をしないのだ。

まあ、笑顔であるだけましであろう。美形を怒らせると凄みがありすぎる。

「ルウ殿たちはなぜこのような山奥に住んでおられるのですか？いろいろと不便でしょうに…」

「人が多いところは苦手だね。以前はいろいろなところを転々とし

ていたが、誰にも煩わされずに過ごせるところが気に入ってね。以来ここに住んでいるんだ。不自由なこともあるが、住めば都さ」

ものは言いようである。決して嘘ではないが詳しい事情は話さない。相手はルウの見た目も相まって、きつと以前に人間関係での問題（おもに痴情のもつれ）があつたに違いない、と勝手に思い込んで深く突っ込んできたりしない。まったくもって美形とやらは得である。

「ところで、クロードさん。あんたこそこんな山奥に一人でどうしたんだ？キラの話じゃ相当深い怪我だったようだし」

いや、話したくなければ別にいいんだ。元気になるまでここでゆっくりするといひ。

すかさず笑顔で付け加えるところは悪魔的だ。悪意なぞ少しもないと見せかけた顔は、輝くばかりに美しい。

短い時間の中でも、この騎士殿の誠実さが伝わってきた。だから、そう言われれば、クロードは恩人に対して事情を話さなければ誠意を見せたことにならない、と認識するに違いない。

案の定少しだけ苦笑いしたあと、話を切り出した。

「実は私はとある任務の為にこの地に赴いたのです。」

しかし、これは極秘の任務です。どうか他言無用に…

などと言い出すので、キラは、おいおい、極秘任務の内容を赤の他人に話してもいいのかよと心の中で突っこんだ。同時に何か嫌な予感がした。

「我が王国の第2王子ユリウス様は高い癒しの能力があり、どんな難病でもたちどころに治してしまうほどの力をお持ちです」

「尊には聞いている。“奇跡の御子”と呼ばれているとか…」

そう答えながら、ユリウス、という名を聞いた途端、キラは心がすっと冷えるのを感じていた。おそらくはルウも同じような心持ちだろう。本当のところ、知っているどころではない。

そんな二人の変化には気づかず、クロードは話を続ける。

「はい。ご気性も穏やかで、兄君である第1王子との仲もよく、我ら騎士を始め、民にも広く慕われたお方です。しかし、ある時、殿下は原因不明の病に倒れられてしまったのです」

癒しの能力はかなり難しい怪我や病気でも治してしまうが、その能力の持ち主が自らに使用することはできない。他人の怪我は治せても、自分の怪我は治せないのだ。

そのことをキラは誰よりもよく知っていた。かつてはキラも、同じ能力を持っていたのだから。

「王室付きの医師を始め、市井で評判の医師、薬師、祈祷師、占術師に至るまで、ありとあらゆる方面の人材を集め、治療に奔走したものの、結局殿下の容体は回復しませんでした。むしろ日に日に悪くなっていくばかりで…。そんなとき、とある噂を耳にしたのです」

寒さ厳しく、凶暴な獣がうろつくことで有名なレギナ山。その山深くに腕のいい医者が住んでいるというのだ。

「……」

話の流れがわかった。このあとの展開も容易に予想できる。すでにキラの顔は引きつっていた。

「私はその噂に一縷の望みをかけました。部隊の派遣を申請し許可をとるには、根拠が噂だけでは時間がかかります。私はそれを待てませんでした。時間が過ぎれば過ぎるほど、殿下は死へと近づかれる。一人で出発した私に、レギナ山の獣たちと、暗殺者たちが待ち受けていました。暗殺者の狙いが殿下の回復を阻止することだったのか、それとも私自身が狙いだっただのかはわかりません。しかし、私は命の危機に瀕していました。正直もう駄目だと諦めてさえいたのです。だが、神は私を、殿下を見捨ててはいなかった！」

クロードは興奮が頂点に達し、けが人とは思えないスピードと力でキラの両手を握った。一時的に痛みさえも忘れていたようだった。

「キラ殿！死にかけていた私をこれほどまでに回復させる技をお持ちのあなたこそっ、私が探していた、殿下を御救いできる唯一の希望であるに違いない！どうか王都へ来て殿下の病を癒してください！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0120y/>

悪魔に支払う奇跡の代価

2011年11月20日19時30分発行